

広島俳句倶楽部

令和二年十月作品集

白谷越え(黒河越え) 佐保光俊

大和政権は、日本統一の過程で五畿七道を整備したが、滋賀県から福井県へ抜ける古代北陸道の道筋は、愛媛県の所在地とともに、明らかになっていない。北陸道に関する記録としては、延喜式(927年完成)の記述が最古のものだが、そこから分かるのは、近江国の最後に新結駅が置かれ、越前国の最初に松原駅が置かれたということまでで、両駅の所在地と両駅間の道筋は、今も比定されていない。一説によると「白谷越え(黒河越え)」が延喜式編纂の頃の北陸道であるという。

つばくらの飛び立つ先の大湖かな

太古よりこの湖に夏日差す

白谷に集まつてくる夏の風

夏草に風のよく吹き黒河越

万緑の白谷越を行きにけり

夏の雲来ては去りゆく黒河越

水が水打つて涼しき黒河越

越前も近江も晴れて懸巢鳴く

まつすぐに松原へ吹く夏の風

夏の雲その峠より湧きにけり

佐保光俊

三日月を見上げてをれば暮れにけり
二十日月安芸をゆつくり雲流れ

村上正人

にはたづみ映してゐたる小望月
朝まだき望月青く残りたる

高尾ひとみ

真夜の風二十日月へと吹きにけり
宵闇の草のにはひへ近づきぬ

あざみ

坂上る我が影長き月夜かな
島渡る船より見上げ残る月

亜矢

厨事終へてもの書く月今宵
湯浴して十六夜の月仰ぎけり

敬子

小望月橋の上より愛でにけり
仏舍利塔脇に名月出でにけり

暁子

蛇行する川に沿ふ町月照つて
寄合に一人二人と月の道

ちどり

母の家月を見ながら帰りけり
月照らす団地の中を散歩しぬ

松本恵和

門の外掃きながら月待ちるたり
縁側の椅子に凭れて良夜かな

美耶

月光の父の部屋まで届きをり
夜の更けて消ゆる波音月明し

阿姫

壁の琴照らしてゐたる夜半の月

井藤希

本を閉ぢ遠く見てゐる今日の月

英一

中空へ音なく昇り今日の月

栄吉

宅配のバイクを停めて月を見る

遠藤さつき

はるばると阿寒の空や旅の月

大橋博子

月の夜の窓に列車の灯り過ぐ

大畑恵

瀬戸内の海を照らせる望の月

かこ

満月の澄みわたる空巡りけり

上島康子

雨やんで芝生を照らす今日の月

紀英子

けもの道照らしてゐたる良夜かな

熊谷ゆり子

うつすらと昼の月ある花野かな

桑門わかこ

花街の上に亥中の月を見し

白神陽子

瀬戸内の島影照らす望の月

新庄憲彦

月明の障子に常の目覚めかな

民

月明り夫の眼を捉へけり

ちかこ

朝の月真青の海を船の行き

津田玲子

芒生け一人眺むる月の夜

友岡葉山子

待宵の空に流れて雲早し

撫子

満月の照らせる波の広がりぬ

ふじ女

三日月はいつも実家の上にある

穂高

流れゆく雲より出でて小望月

松田裕子

縁側の端まで届き月明り

幹

月を待ち見渡す空に赤き星

みさ子

名月に手を合はす子の愛らしき

宮田保江

満月を身を乗り出して眺めたる

森口良樹

対岸を人の通れる望の月

やす保

名月のビルの間に輝けり

山崎桂子

旅路から帰り見てゐる今日の月

山霧を伯耆の国に入りにつけり

灯を消してこの谷に聞く虫の声

歳にまづ秋の朝日のあたりけり

花芙蓉村に大きな岩のあり

空青く雲白くして岩魚釣る

あの山に日の差すまでは岩魚釣る

岩魚釣終へて沢音聞きゐたり

ミズナラの黄葉を沢の流れけり

わが腕にしばらくとまり秋の蝶

秋の日の暮るるまで居る伯耆かな

佐保光俊

石段に腰掛けて聞く法師蟬

鶏頭の向うを子ども駆けゆけり

雨しづく打ちて揺れたる実紫

水澄むや我の方へと鯉の来る

路面電車降りて見上ぐる秋の空

夜半の雲隠してしまふ既望かな

草の穂に触れては笑ふ女の子

残葉を終へ臥待の月仰ぐ

大川に傾げる松の新松子

金木犀香る朝となりにつけり

村上正人

虫の音に人は家路を急ぐなり

さまざまの紫の花大花野

日の差していよいよ松虫草淡し

おしろいに道端の子のしやがみたる

雨やんでまた待宵の静かなり

小望月流れのはやき雲を出づ

石段に座り見てゐる今日の月

名月をさへぎるものなかりけり

宵闇をしづかに川の流れたる

こほろぎに日記を書く手止めにつけり

高尾ひとみ

一碗の白米の飯涼新た

子の遊ぶ丘を囲みて曼珠沙華

大漁はラッパで知らせ鰯船

秋時雨向ひの島を隠しけり

見上ぐればぼつぼつ落つる木の實かな

風折れの枝に下がりて柿二つ

木犀の花の前なる屋敷神

反り橋を自転車押して望の夜

良夜なり海おだやかに筏浮き

沖合に交す霧笛や夜半の月

あざみ

手際よく厨事する十七夜

父と子の会話が弾む良夜かな

本を読み診察を待つ秋の昼

草の繁電車の中に舞つてをり

山里のうどん屋に居る秋日和

長椅子のデイズル列車秋日和

新しき事典を開く今日の月

色変へぬ松慰霊碑の方へ向く

十月の平和の鐘を鳴らしたる

十月の被爆ドームに日の射して

亜矢

きはやかに青葉を映し朝の川

朝な朝な咲く朝顔を数へたり

つゞきと朝顔あまた咲きにけり

秋の雲吹き寄せられし夕べかな

颱風の過ぎたる池のあめんぼう

桜紅葉散り敷く土手を散歩する

桜紅葉一枚拾ひ持ち帰る

枸橘の實の色付きて太りたる

赤黒く光る櫛を一つ取り

鈴生りのぎんなんに枝しなだれて

敬子

海にまだ日の高くあり秋燕

しばらくは行く秋雲を仰ぎたる

海匂ふ駅に降り立つ星月夜

夕暮の花野に風の立ち易き

拾ふ間も落つる音して栗林

団栗を踏みつつ訪へり美術館

四阿に秋蚊潜んでゐたりけり

水音の聞こゆる丘に稲架一つ

十月の風や天守は川に向き

城跡の礎石を歩く小鳥かな

暁子

花桔梗ショートヘアに髪切つて

秋の風脚立に上がり洗車せり

母が家の漬物部屋にちちろ鳴く

稗抜いて一音に飛ぶ浮塵子かな

葛の花臨月の子の里帰り

木の上で無花果掬いで食べにけり

山へ入る道に沿うたる曼珠沙華

トンネルを出れば古里萩の風

生み月の近き人ゐる花野かな

芒原一本の道選びたる

ちどり

入港の船にとまりて秋菖

コスモスの押し花をして手紙くる

スニーカー濡らして歩く露の道

秋雨の激しき中を出勤す

真ん丸の子芋の汁を啜りけり

仕舞田は家族総出で稲刈る

宵闇の足元に猫来てゐたる

月光の白壁に沿ふ人の影

月今宵夫と杯重ねをり

久々に姉訪ね来る十六夜

松本恵和

虫の声夜の更けてより小さくなり

天高しべランダの薔薇咲き揃ふ

鳥の来て小枝を揺らす初紅葉

秋澄めり旅案内を見てをりぬ

大寺の鐘くろぐろと秋夕焼

はろ酔でひとり散歩の月見かな

月の海しづかに満ちて来たりけり

秋の午後同窓会の顔揃ふ

コスモスが窓にふれたる無人駅

月残り大海の波静かなり

美耶

帰国して花の国土の空仰ぐ

すすき手に埴輪見てゐる米寿なり

菩提寺の裏に聞きをり虫の声

花芒抱ふるほどを甕に活け

広島城照らしてゐるたる今日の月

名月を見てゐて夜の遅くなり

金木犀堀の内より香りたる

山の上の鉄塔一基時雨くる

万両や一日一句つづけをり

阿姫

本すこし読んで眠れる虫の夜

桐一葉散りてより裏見せにけり

高窓の秋夕焼の火の如し

包丁に力を入れて栗を剥く

まつたりと口にひろがる栗ご飯

鮭の腹裂いていくらを取り出しぬ

曼珠沙華仏舍利塔へ続く道

秋給妣の手書のメモのあり

帖紙の紐を結べる月明り

大橋博子

遠州の大念仏に夏の雨

提灯の行列に来る夏の雨

列車から稲刈る人を見てゐたり

稲を干す声のしてゐる日曜日

稲架けて星の明るき夜となりぬ

父が見てゐて無花果を挽ぎにけり

無花果の乳の匂の嫌でなく

みどり児の眠りうつくし秋の風

虫の夜の旅の袍を詰め終へて

夏日差すホームを回送電車出る

陸橋に登校の子や休暇明

カーテンの舞ひ上がりたる台風裡

台風に仕舞ひし植木鉢の数

点検の槌音響く秋の駅

展览会終へて降ろす絵秋燈下

金木犀ゆらし貨物列車過ぐ

信号を待つ間揺れる猫じやらし

無花果を綱をくぐりて挽ぎにけり

岩たたく波静かなり秋の夕

目も耳も老いしと思ふ星月夜

また一戸空家となりて星月夜

花芒夕日を受けて揺れにけり

満月の色変はりゆく高さあり

ベランダの柵にもたれて見る良夜

この月を一人眺めて酒を酌む

主居ぬ庭に蜘蛛の囲居待月

リハビリの義父の歩いて秋高し

桑門わかこ

新庄憲彦

友岡崇山子

俯いてどんぐりどんぐりただ歩く

カーテンが今だけ光る秋夕焼

上向きに息吹きかける鰯雲

朝寒やポストに新聞紙の頭

昨日より縛られてなお秋桜

木犀の果てにあるはず一軒家

塗り箱の手に温かし栗強飯

名月に男子高校生一人

遮断機が降りてくる空昼の月

ふじ女

白鷺のまつすぐ歩く浅瀬かな

白雲の二つに分かれ秋日和

白桃を桶に浸ければすこし浮き

ひとしきり潮風の吹く檸檬かな

水澄みてばつと散りたる魚の群

教室の二部屋灯る夜学校

上の棚田下の棚田の赤とんぼ

引き込み線沓立草へ伸びゆけり

木の下に人の影あり今日の月

松田裕子

人声の遠のいてゆく門火かな

浮雲の早き流れや花芙蓉

虫の夜のごみを出しをる勝手口

門に待つ塾帰りの子五日月

庭先に妻を呼びたる月今宵

二人して縁に見てゐる望の月

ほろ酔の湯の街あるく良夜かな

小鰯をバケツに貰ふ漁の朝

ハーレーの集まつて来る秋の朝

森口良樹

露の皮すーと一筋剥けたとき

凌霄花垣根一面覆ひたる

妻が呼ぶ卓に茄子のレシビ置き

娘より久々の電話虫が鳴く

畦道に蔓珠沙華咲く棚田かな

さざ波の渚に寄せる良夜かな

庭砂の簾目に散る紅葉かな

蓮根堀丈の三尺隠れたり

英一

コスモスや測量機器の据ゑられて

実紫シヨートステイの人の愛で

サドル拭く一手間増ゆる秋の朝

団栗を踏み来る音に道譲る

城跡に匂うてゐたり残る菊

神社から見下ろしてゐる運動会

蔓珠沙華石の仏の並びたる

折り紙に秋草を添へ窓に置く

栄吉

海岸を親子で歩く野分晴

浮橋のまだ揺れてゐる秋の夕

草山の踏みつけ道や男郎花

月明の壁を見上ぐる被服廠

夕月や自転車ならぶ駅広場

月光に眺めてゐたる島の影

縄文の暮しの跡や栗の秋

井藤希

階段を登りて秋の那智大社

新涼に轟きにけり那智の滝

秋高し嫁と詣でるお伊勢さん

秋空を詠みて百寿の翁かな

住む人の無き里山に芒揺れ

サイレンの聞こえてゐるたる月の宵

金木犀こぼれ尽くせる散歩道

大畑恵

熊除けの電気の柵を寺に引き

秋ひと日寺に映画を上映す

死といふがふと近づいて秋の暮

店先の林檎あれこれ手にとりて

弟がふいと現はれ秋の暮

玄関に石榴を置いて眺めたり

紀英子

この国に生まれし幸や虫の声

山登り赤く広がるまんどゆしやげ

秋思なりオカリナの夜てふ演奏会

鰯雲は空のさざ波手を伸べる

風の物干し棹の立てる音

手応への暮らしの欲しや落葉掃く

白神陽子

芒吹く風の向うは松林

土手に生え車前草の景の大きな

湿原の奥の森から虫時雨

強風に稲の半分倒れけり

村の果て赤蕎麦の花広がりに

芸北の細き流れが茅揺らす

宮田保江

天空に満月青く輝けり

名月やあちこち匂会開かるる

月明り庭隅の草照らしけり

運転のフロントガラス十七夜

民

庭草をひらひらと飛ぶ秋の蝶

ピアノ聴き友と語りて月の夜

木犀の米粒ほどの蕾かな

山茶花の一輪咲いて眺めをり

津田玲子

軒先に束ねて飾る草の花

川縁に二三人ゐる良夜かな

十六夜の月の川辺を歩きけり

いつの間に朝顔の実の地に落ちて

樫子

軒先のゴーヤあまたの実をつけて

朝夕は秋の気配の風入るる

秋の日を背中に受けて畑仕事

かこ

無造作に束ねコスモス揺れてをり

間の抜けた声の鴉や豊の秋

十年は乗った車や秋の星

熊谷ゆり子

畳まで赤く染まりて秋夕焼

長き夜や料理の本に附箋増え

木犀の香や朝刊を取りに出て

ちかこ

謎解きのメール受け取る夜長かな

十五夜の大河を照らす光かな

金星と有明月の並びたる

穂高

貨物列車軋みて止まる秋の朝

友人にスマホで知らす良夜かな

新米をおにぎりにしてバスの旅

みさ子

朝の日に終の芙蓉の揺れてをり

銀杏の匂うてゐるたる宮の前

秋深し朝粥口に含みたる

やす保

涼しげな風が吹いてる秋の朝

秋の昼ワンピース読む痩せ男

阿波久

外つ国の町に上りて秋の月

望遠鏡借りて眺むる宿の月

遠藤さつき

櫨の実が熟れてメジロの来てるたる

西空を鴉の飛べる秋の暮

上島康子

秋祭夜ごと稽古の笛聞こゆ

店先の林檎の香り足止める

幹

望の月夫の寝言を聞いてをり

深夜二時灯りを消せば月明り

山崎桂子